様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１９７

研究課題名（和文）日本演劇と国際舞台　マダム花子一座を中心とした海外巡業劇団の総合研究

研究課題名（英文）Japanese Theatre and the International Stage: An Comprehensive Study on Japanese Touring Companies Centring on Madame Hanako's Company

研究代表者
根岸　理子（NEGISHI, Takako）

東京大学・教養学部・特任研究員

研究者番号：８０３２２４３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：海外の人々が「日本演劇」を目にする機会がほとんどなかった20世紀初頭、20年近くにわたって西欧で活躍し、彫刻家オーギュスト・ロダンに注目され、その唯一の日本人モデルともなった女優「マダム花子」の一座の実態に関する調査をおこなった。
海外における現地調査により、劇評や舞台写真等の新資料を得、これまでその実態がはっきりしていなかった1907年と1909年のアメリカ公演の模様を紹介することができたのは、学界への大きな貢献であった。マダム花子一座が本拠地としていた英国においても調査を進め、「海外巡業劇団の演劇におけるジャポニズムへの関与」という新たな研究テーマを得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the performances of Madame Hanako's company which were given at the beginning of the 20th century when Western people had few chances to see Japanese theatres. Madame Hanako was a Japanese actress who toured the West for nearly twenty years and is the only Japanese model to have been used by August Rodin.
Through field work research overseas, I was able to collect new materials such as theatre reviews and stage photographs of her performances; as a result I was able to make clear how her company's American tour in 1907 and 1909 took place. It has greatly contributed to the field of study. I did field work research in the UK where Madame Hanako's company also had a base. Through this research, I was able to hit upon a new research topic, namely ‘The Influence of Japanese Touring Theatre Companies' Performances on Japonism in Theatre’.

研究分野：演劇学

キーワード：国際交流　オリエンタリズム　エキゾティシズム　ジャポニズム　女優

１．研究開始当初の背景

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、日本の巡業劇団が果たした役割には、計り知れないものがある。

それらの巡業劇団のうち、川上音二郎・貞奴（マダム貞奴）夫妻の一座については、夫妻がのち日本演劇界でも活躍したこともあって、研究が進んでいるが、海外で女優としてデビューし、20 年におよぶ活躍ののち、日本に帰国し以後舞台に立つことのなかった「マダム花子」については、関係資料が海外に分散しているため、まとまった研究はなされていなかった。研究代表者は、この「マダム花子」一座の活動について博士論文で取り上げて以来、調査を続けてきた。

「マダム花子」は、20 世紀初頭、国際舞台で名を成した日本女優で、演劇史上非常にユニークな存在である。「マダム花子」こと太田ひさは 1868 年、愛知県の裕福な農家に誕生し、幼い頃から日本舞踊や三味線などの芸事に親しんだが、家庭の事情で女役者の一座の子役として舞台に立つようになり、のち、芸者になる。二度の結婚の失敗から、経済的苦境に陥り、デンマークのコペンハーゲンで催されることになった小規模の博覧会に踊り子として参加することを決意し、1902 年、34 歳で渡欧。博覧会終了後も帰国せず、英国ロンドンに在住していた日本芸人を集めた一座に、女優として参加する。当初は端役を演じていたが、花子より先に国際舞台にデビューし、成功をおさめていた川上音二郎・貞奴一座の第二回海外巡業をお膳立てした名プロデューサー、ロイ・フラーに見出され、主演を務めるようになる。以後、ヨーロッパ 18 ヵ国とアメリカを巡演して人気を博し、1921 年日本に帰国するまで舞台に立ち続けた。

花子の演技に魅了された彫刻家オーギュスト・ロダンは、53 点にもおよぶ彼女の彫刻を残し、また、コンスタンチン・スタニスラフスキーやフセボロド・メイエルホリド、エドワード・ゴードン・クレイグなど、当時の名だたる演出家が、彼女の舞台から強いインパクトを受けている。

こうした「マダム花子」一座に対する研究は、日本側と西洋側でその傾向が異なっている。「マダム花子」は、母国日本においては、ロダンのモデルとしての彼女に注目した美術史研究家や、森鷗外の小説「花子」に注目した文学研究者によってごくまれに取り上げられるのみであった。その背景には、当時の日本演劇が国際舞台において真剣に受け取られたはずがない、という日本の演劇研究者の思い込みがあるように思われる。そのため、花子の実際の公演の模様や、彼女の舞台が欧米の観客にどのように受け入れられたかについては、これまで、ほとんど紹介・研究されてこなかった。

海外においては、*Asian Theatre Journal*（Vol.5, No.1, 1988 年）で花子の特集が組まれたことがあったが、「花子の舞台には、西欧の演劇にはない他者性が見られた」という文脈の論文が多い。この見解をさらに発展させたのが、エリカ・フィッシャー＝リヒテで、川上貞奴や花子の舞台は「当時の西欧のリアリスティックで心理的な演劇のカウンターモデル」となったとしている（Erika Fischer-Lichte, *The Show and the Gaze of Theatre*, University of Iowa Press, 1997 年）。しかし、これらの位置づけは、あくまでも「当時の西欧の観客・芸術家が花子の舞台に興味を持ったのはなぜか」という疑問に答える形のものであり（その〈他者性〉ゆえ、という答えは最初から用意されている）、花子の経歴やその舞台を詳細に分析した結果、導き出された結論ではないのである。

こうした偏りをなくし、日本における資料・調査と、西欧における資料・調査をつなぐ総括的な研究をおこなう必要性を感じ、当研究に着手した。

２．研究の目的

「マダム花子一座」の実態を調査・分析することで、20 世紀初頭の「日本演劇」が世界でどのように受け取られていたのか、また、「日本演劇」を「日本演劇」たらしめている要素が何なのか明らかにする。

マダム花子（1868‐1945）は特異な女優である。彼女はまず「芸者」として渡欧し、海外において 20 年近く「女優」として活躍した。当時の英国の俳優名鑑『フーズ・フー・イン・ザ・シアター』には、二代目市川左団次と共に、日本俳優の代表として紹介されており、その時代の彼女の人気のほどが分かる。しかし、帰国後、母国で舞台に立つことのなかった彼女は、日本においては、知名度が低く、ただ彫刻家ロダンのモデルとなった女性として知られるのみであった。

花子と同じく 20 世紀初頭にアメリカ・ヨーロッパ公演をおこなった「川上音二郎・貞奴一座」や「筒井徳二郎一座」などに関しては、個々に調査が進められているが、「マダム花子一座」に関しては、資料が海外に点在しているため、不明な点が多々あるのが現状である。

花子の舞台で特に注目されたのは、身長 136 センチ、体重 30 キロと非常に小柄な花子の見せた迫力ある「ハラキリ」のシーンであった。

そのあまりのインパクトゆえに、彼女の舞台を「見世物」とみて、快く思わない日本人もあったが、ロダンをはじめ、各国の芸術家たちは、彼女の演技を支えている技術に注目した。ロダンが花子をモデルとしたもので最も有名な作品「死の顔・花子（現在、新潟市美術館所蔵）」は、花子がハラキリの場面で「見得」をして「にらんだ」瞬間を捉えたものなのである。これは、瞳を鼻柱近くに寄せ

ることで、むろん常人にはとても真似できることではない。

つまり、花子は、女役者の一座の子役としての訓練や経験（女役者は歌舞伎役者の演技を手本としていた）及び芸者としての訓練や経験を通して、あきらかに歌舞伎の技術を身につけていたのであった。花子の舞台は、どれも異国趣味を強調したものばかりであったが、それを支える確かな技術を彼女が持っていたため、長期にわたって興行を続けることができたのである。

彼女は、日本演劇と日本俳優のイメージを、歌舞伎に先駆けて、欧米の観客や芸術家に印象づけたのではないだろうか。花子に関する調査を通して、日本の海外巡業劇団の系譜を整理し、国際舞台における「日本演劇」「日本俳優」像を検討することを目指す。

花子の見せた「日本俳優のイメージ」のインパクトは強く、その後、海外公演をおこなった歌舞伎のみならず、現在の日本演劇の海外公演においてさえ、その残像が見られるように思われる。花子一座の実態を明らかにし、「日本俳優」「日本演劇」を海外はどう見てきたのか考察することによって、「日本」という国に海外が抱いてきたイメージも浮かび上がってくることであろう。

３．研究の方法

本研究では、海外に点在し、個別に考察されることの多かった花子一座の公演に関する各国の資料を収集し、点と点を結ぶ作業をおこなった。花子はヨーロッパ 18 ヵ国とアメリカを巡業しているが、花子との縁が深く、資料が残っていることが確実である国々の調査を優先した。

まず、前回の科研費による調査で課題を残したアメリカでの調査を実施した。その後、花子一座が拠点としていた英国での調査を実施し、新聞・雑誌等の記事や劇評、図版を収集し、一座の公演の模様や評判を明らかにする分析作業をおこなった。

同時に、花子が国際舞台に飛び出した背景を探るため、日本での花子に関する資料を集め、日本と海外双方において資料の収集・分析をおこない、花子研究を総合的なものとすることを目指した。

４．研究成果

海外における現地調査により、マダム花子一座の劇評や舞台写真・舞台絵等の新資料を得ることができた。

具体的には、ニューヨーク公共図書館（The New York Public Library）およびニューヨーク公共図書館の専門図書館パフォーミングアーツ図書館（The New York Public Library for the Performing Arts）において調査をおこない、花子関係の資料を収集し、これまでその実態がはっきりしていなかった 1907 年と 1909 年のアメリカ公演の模様を明らかにすることができた。

1907 年 10 月、花子一座は、パリで花子の舞台を観て彼女を高く評価したアメリカの俳優アーノルド・デイリーとの契約により、ニューヨークのバークレー・ライシアム劇場で公演をおこなった。44th Street 5th Avenue に位置していた、客席数約 450 席ほどのバークレー・ライシアムは、かつて川上音二郎・貞奴夫妻も出演した劇場である。

この第一回アメリカ公演では、花子一座は巡業をせず、バークレー・ライシアム劇場との契約が切れた時点で、パリに戻った可能性がある。その意味では、第一回アメリカ公演というよりも、第一回ニューヨーク公演と呼ぶべきであるかもしれない。契約は、当初冬シーズン約半年間の予定であったものを、興行を打ち切られて（あるいは、切り上げて）の、また、貴重な座員を 2 人も失っての（新聞記事によると、2 人は駆け落ちをして姿を消してしまったらしい）帰欧となったようである。

次の 1909 年 1 月のニューヨーク公演では、予期せぬハプニングがあったようである。手配しておいた小道具や衣装が劇場に届かず、間に合わせのもので公演をおこない、すぐに興行を打ち切られることとなってしまったのである。

いずれにしても、アメリカにおける 2 回の公演は、花子にとって、海外で巡業劇団を運営していくことの難しさを、味わわせるものとなったようである。

しかし、収集した劇評を読む限り、ヨーロッパでの公演と同じように、その演技（特に、やはり名高い「ハラキリ」の場面の演技）で花子がニューヨークの観客を惹きつけたことは確かである。また、花子は、当時活躍のめざましかったアメリカの画家ユージーン・ポール・ウルマンやベン・アリ・ハギンに、その姿を描かれる程の強い印象を残している。ロダンとの関係で言及されることの多い花子であるが、こうした他の芸術家に与えた影響に関しても、今後、詳しく調べていく必要があることと思われる。

アメリカでの調査に加え、マダム花子一座が本拠地としていた英国においても調査を進め、主として大英図書館（The British Library）で、新たに、新聞等に掲載された写真や絵（花子の似顔絵や舞台姿）および劇評などを得ることができた。それらの資料により、マダム花子が海外において、いつ頃まで舞台に立ち続けていたのか、その時期をほぼ確定することが可能となった。

ロンドンのアンバサダーズ劇場支配人チャールズ・B・コクランの要請で日本の踊り子を集めるため、1916 年に日本に一時帰国した花子は、募集に応じた踊り子たちを連れて英国にもどったものの、戦争の激化で公演が困難になり、引退したと思われていたが、

実際は 1918 年末まで、英国各地の舞台に立ち続けていたことが判明した。
　花子は、1921 年に日本に帰国し、岐阜県に住んでいた妹のもとに身を寄せて余生を送ったのであるが、その岐阜での調査により、帰国後の花子に、海外での体験やロダンのモデルとしての経験についてインタビューした人の記事が見つかるなど、国内外で収集することができた貴重な資料により、花子の人物像および花子の一座の全体像が明らかになりつつある。
　こうした調査結果は、論文および書籍で発表した。「花子一座および日本の巡業劇団のジャポニズムへの関与」という新たな研究テーマを得ることができたのも、大きな収穫であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

根岸理子、「アメリカのマダム花子―ニューヨーク公共図書館所蔵資料に拠る一考察―」、『Kyoritsu Review』第 43 号、2015 年、37－54 頁、査読無

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　１　件）

神山彰、川添裕、井上さつき、根岸理子、森佳子、茂木秀夫、根岸徹郎、武石みどり、中村緑、小笠原愛、日比野啓、星野高、田中徳一、森話社、『演劇のジャポニスム（近代日本演劇の記憶と文化 5）』、2017 年、358 頁（89－118 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
　根岸　理子（NEGISHI, Takako）
東京大学・教養学部・特任研究員

研究者番号：８０３２２４３６

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）